

1997 年 5 月 1 日 北海道厚田村 濃 昼 ごきびる

伊丹空港 8:30 発 JAL571 第 1 便で千歳空港。JR で札幌駅に直行して高い無線アンテナが目印だという緑の 4WD 車を探して O さんと落合う。札幌市内を抜けると左に石狩湾が望める道をどんどん進み、なんとなくヒメギフが遊んでいそうなゆるやかな斜面をもつ林が辺りに目立つ厚田村に入る。天気はまずまずだが快晴ではないため気温があまり上がらない。O さんが数多くのエゾヒメギフに出会うには最適だと考えて第一に案内してくれた目的地は、厚田村からさらに奥に入った山地で、残念ながら時期が早かったようでまだ残雪があり、車から降りると寒気さえ感じて蝶が出てくるような状況ではない。第二の候補地はメイン道路からつづれ折りの林道をいくらか登った場所で、ヒメウスバの食草だというエゾエンゴサクのケシ科特有のきれいなウスムラサキの花が至る所に咲いているがヒメギフが出てくるにはやはり肌寒い。やむをえず標高の低い次の候補地まで戻ることとなったが、その濃昼の沢についた頃は雲も増えて絶好の天候からはほど遠い。この本命 point に行ける本林道は車が進入禁止となっており、しかたなく右の側道を辿って 50m ほど進む。と、ラッキーにも道路横の広い斜面に咲く黄色いセイヨウタンポポを訪れている最初のエゾヒメギフチョウが目に入る。O さんが先にネットをどうぞ、と勧めてくれて初の 1♀をゲット。♀なので生かしたまま三角紙に納める。次いで沢が望める広い道で風に流されるように現れた 2 頭目の♀を O さんがみごとなネットさばきでゲット。彼の場合採卵は無用ということできなり胸をつまむ。対岸遠くにはリュウキンカのみごとなまでに黄色い群落があり、時期がよければあのような環境にエゾヒメギフチョウが群れを成して集まる、と話してくれる。最初に案内してくれた残雪があった場所などはそういう絶好の point らしい。先ほど捕獲して生かしたままの母蝶から採卵を試みるべく、沢を望める斜面でエゾヒメギフの食草であるオクエゾサイシンを 1 株採取する。



1997 年 5 月 3 日 北海道厚田村濃昼

札幌バスターミナルから単独で厚田村濃昼に向う。帰りは濃昼からはひとつ手前となる厚田村役場始発の札幌行バス便があり、これを利用すれば少しでも長い時間蝶を追える。そこで車窓から濃昼－役場間の歩くべき距離や環境を観測する。が、車が激しく往来する海岸沿いのせまい部分を、途中短くはないトンネルを含む 10 キロ以上を覚悟して歩かなくてはならなく、濃昼からの最終バスが限界だと知る。さいわいこの日は天気がよくて暖かい。終点の濃昼部落バス停をあとにして、車がひっきりなしに走りぬける道路沿いを歩き始めるが、先日 O さんが車で案内してくれた point がどこにあるのか、いったいどれだけ歩けばいいのか、助手席から漠然と眺めていた風景にこれという印象がなく、車がエンジン音を高めて登りはじめるあの急坂も登るとしたらずいぶんきついな、と覚悟を決める。何の因果か平坦な側道を 50m ばかり進んだ足元路面でアリに運ばれるエゾヒメギフチョウを助けあげる。車と接触したのか下半分の胴体がなくなっているが、羽やアンテナには損傷がなくきれいな♂である。今日は期待できそうだという予感がする。坂道の手前に一見駐車場風の広場があり、奥の高台が墓地になっていて、セイヨウタンポポの黄色い花も咲いているので寄り道してみる。春型のきれいなルリシジミがただけでヒメギフの姿はない。それではいよいよ急坂を登るか、と坂道開始地点のヘアピンカーブにさしかかったそのとき、なんとその右手に、O さんの車が右折して入り込んだ林道への入口の特徴がわずかが記憶に残っていてうれしくなる。大きな急カーブで見通しが悪い上になかなか途切れない車の列をなんとかしのいで林道に入る。沢の流れがとてもみずみずしい。水辺できれいなルリシジミ

♂が吸水しているがスギタニルリではないのでそのまま先に進む。林道の手前を大きく右手に進んだ斜面に咲くセイヨウタンポポには、この日もエゾヒメギフチョウが訪れており、さらには道路沿いを直線的に飛翔する個体もすんなりネットインでき、労せずには♂♀ペアをゲットしてここを訪れたことが正解であったと満足する。クマザサの茂みを縫うように飛ぶ個体もみられ、食草のオクエゾサイシンが自生する道なき斜面をよじ登ってみると、クマザサの根元に美しい濃いピンク色のサクラソウがひっそりと咲いており、この花の蜜を求めてエゾヒメギフチョウが舞っていることが分かる。先ほどのタンポポの花をもう一度チェックすると今度はヒメアカタテハが訪れている。

〇さんと来たとき、徒歩で中腹まで行きながら天候が思わしくないために引返した本林道を思い切ってさらに上まで登ってみたく、腰痛の再発をかばって Video など重い荷物をクマザサの茂みに隠して出発。このような大自然のなかで、荷物が誰かに持去られるかもしれないなどと考えたくはないが、本林道が進入禁止のために山菜採りを目的とした車が次々と入り込んでくるので用心するにこしたことはないだろう。さて、本林道の車進入禁止ゲートに渡されたバーをかいぐると、山菜採りを目的としたと思われるリュックを背負ったおじさんがひとり 100m ほど前方を登っている。勾配のある砂利道脇には日向ぼっこをする越冬したクジャクチョウや C-タテハがいて、人の気配に驚いて飛び出すがすぐに別の場所で羽を広げる。さすがに新鮮体はいないがこの動きはうれしい。浅間温泉で春を感じさせてくれたコブシがここでも満開で迎えてくれ、真っ白い花びらを林道に落としている。早春の山のさわやかな気分を 4 月、5 月と 2 度も味わえて幸せを感じる。

やがて道路沿いに残雪が目立ちはじめ、さらに進むと道が二つに分かれる。先を歩いていたリュックのおじさんはまっすぐに本道を進んでいったが、左下方から沢のせせらぎが聞こえてくる、谷川に続いているらしい下り道となった左に入る。広い水場に出て辺りの光景に感激。小さな滝が落ちる崖際一面にカタクリやサクラソウが、さらに水場近くではリュウキンカが黄色い花影を水面に映している。リュウキンカは滝の左上斜面遠くにも黄色の美しい群落を形成し、沢が林道を横切って下方に流れる日当たりのいい空き地のあちこちにカタクリがきれいな花を咲かせてゆるやかな風にゆれている。こんなすばらしい光景を Video に納めないで帰るわけにはいかない。距離は短くない勾配のある山道だが、意を決してクマザサの茂みに隠した Video をとりに戻る。登ってきた方向から進入禁止のはずなのに車で山菜とりにきているひとがいる。どうやら林道反対側からは車が入れるらしい。そちら側にはカタクリの群落もあるとのことだが、徒歩の身でそこまで探検はできない。往復 30 分の無駄をやらかし Video を回収して戻った谷場で、滝が落ちる崖際に咲くカタクリやリュウキンカを転々と吸蜜して回るエゾヒメギフチョウが目に入る。が、被写体となる位置に降りてくることはなく、どんどん上方へと消えてしまう。しかたなく麓で採った飛ぶ元気のない個体をカタクリにとまらせて Video 撮影をする。タイミングよくルリシジミがカタクリの花めがけて飛んでくるのが画像に収まるが、すばやい動きだけが左上にキャッチできている。その後、エゾヒメギフチョウは姿をみせず、あいかわらずクジャクチョウと C-タテハが飛び立つ林道を下りながら周辺の山肌を彩る樹々の若葉が本当にきれいで何度か振り返ってしまう。まさに後ろ髪をひかれる思いである。立ち去ってしまうのを名残惜しく感じつつ、ついには山を離れてバス停に向かう。

車の往来が激しくなかなか道路右側に渡れない。しかしこのことが幸運を呼ぶ。バス停が近づいた頃、左手にフキノトウがあちこちに芽をだした畑地があり、そこをヒラヒラと飛ぶエゾヒメギフチョウが目に入る。踏み込むと足場がゆるくて靴がめり



970503 濃屋 エゾヒメギフ♀



970503 濃屋 エゾヒメギフ♂

込むが、そんなことでためらってはいられず、背後を追走してネットインする。三角紙に納め終わらないうちにあらたなエゾヒメギフチョウが現われる。気がつくところの畑地の奥手崖状斜面にはカタクリとサクラソウが密度濃く自生しており、食草のオクエゾサイシンも点在していて、こんな民家近くの平地でも本種が発生していることに納得する。